

なぜ人々はスポーツをしながらおしゃべりをやめないのか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/36019

なぜ人々はスポーツをしながらおしゃべりをやめないのか

学校教育教員養成課程 保健体育

00-098 湯浅 範子

第1章 緒言

1. 動機・目的

過去、部活動やスポーツ少年団に所属してきた筆者の経験から、競技志向のスポーツ集団では、練習に専念することが第一であり、おしゃべりは厳禁であることを強く実感した。地元の総合型地域スポーツクラブの教室に参加したとき、人々がスポーツを楽しむ一方、自由におしゃべりすることも楽しんでた。ここでは、スポーツすることとおしゃべりすることが同等に大切にされている。スポーツとおしゃべりは切り離せないもの同士ではないかと考えるようになり、これまであまり注目されてこなかった、スポーツ中のおしゃべりを含めたスポーツのあり方に迫ってみたいと考えた。

おしゃべり厳禁とされているスポーツ集団がある一方で、おしゃべりが歓迎されているスポーツ集団も、確実にしかも身近に存在することがわかった。そのような集団の中で、人々がスポーツをしながら、どのように会話しているのかを明らかにするとともに、なぜ人々はスポーツをしながらおしゃべりをやめないのかを考察する。

2. 先行研究の検討

スポーツ活動中に、レコーダーによってプレイヤーの生の音声言語を収録するという方法を用いている研究はあるが、その研究目的は中心プレイヤーの言語コミュニケーションがチームに貢献しているかを比較、検討するものであり、本研究の目的とは異なる。また、私語に焦点を当てた研究はあるが、それは授業中のものであり、しかも私語をよいものとしてとらえていないことから、本研究の私語（おしゃべり）に向かう姿勢とは異なる。本研究は、人々のスポーツ活動を初めて、おしゃべりという側面から検討する新しい研究である。

第2章 研究方法

1. 課題

- (1) Tの会の活動中に交わされる参加者の会話を収集する。
- (2) Tの会の活動中に交わされる会話の様子を明らかにする。
- (3) スポーツ活動中の会話とプレイには、どのような関係があるのかを明らかにする。

2. フィールドワークの採用

課題に取り組むにあたり、スポーツをする人々の会話、表情、雰囲気、活動の流れなどをありのままにとらえることが大切であり、本研究ではフィールドワークを採用することが適当である。筆者も活動に参加し、メモをとりながら観察を行う。また休憩中等に、必要に応じて参加者に質問する。質問以外の筆者からの発話はなるべく避け、故意に話題を発生させてしまわないように注意する。参加者から質問されれば、自然な受け答えに努める。活動中の声は、MDレコーダーによって参加者の生の音声言語を収録する。また、ビデオカメラによって活動中の様子と音声を収録する。

3. 分析の視点

- 視点1 発する言葉の種類…どのような言葉を発しているのか。
- 視点2 会話の起点…どのように会話は始まるのか。
- 視点3 会話の伝染…どのように会話の輪は大きくなっていくのか。
- 視点4 会話の時間的位置…活動中のどの時点でどんな会話をしているのか。
- 視点5 プレイの集中度…プレイの集中度は会話に影響されるのか。

4. 研究の対象「Tの会」

Tの会についてフィールドワークを行う。毎週水曜にラージ卓球、金曜にフレッシュテニスが行われており、特に会話が盛んなラージ卓球を観察する。活動はいずれも午前10時から11時30分までである。Tの会は、50～60代の男女の計10名で構成されている。運動に長けたTさん（男性）が同級生に呼びかけることによってできた会で、出席、欠席はもちろん、活動中のおしゃべりも自由であるというのびのびとした集団である。

5. フィールド風景の概要

ラージ卓球への定期的な参加者は男性1名、女性6名の計7名であった。10時以前に到着しているのは2、3人ほどで、「今日は〇〇さんが来る」「来ない」と口にしながら、球を打ち始める。参加者が奇数で余りができる場合でも、その人を含め卓球をしながら全員で好みに会話する。10時過ぎになると他の参加者も遅れて顔を見せる。「おはようございます」と言って卓球場に入り、言いたいことがあれば、相手が卓球をしようとして休憩しようとして話しかける。話しかけられた相手もそれに応える。だいたい10分おきに練習相手を代える。10分経ったところでTさんが「ラスト」と合図する。「お願いします」で始まり、「ありがとうございました」で終える。球を打ち合うのは一対一でも、会話は一対一のときもあれば、球を打ちながらも全員が会話に参加することもある。話が盛り上がりすぎて、卓球が中断することもしばしば見られ、そのまま休憩に突入することもある。プレイが白熱しているペアは、お互いにかけて声を発しながらプレイに集中する。しかしほかから話しかけられると、必ずそれに受け答えをしている。ここでは、プレイよりも会話のほうが大事にされているような印象さえ受ける。

第3章 結果

視点1 発する言葉の種類

人々が活動中に発する言葉は、①「スポーツに関すること」、②「Tの会に関すること」、③「スポーツ以外に関すること」の3つに分類される。①は、かけ声、プレイに関するつぶやき、技術に関する言葉が当てはまる。②は、あいさつ（本日の活動開始のあいさつ、プレイ開始のあいさつ、プレイ終了のあいさつ、本日の活動終了のあいさつ）、進行の言葉（残り1分の合図、プレイ終了の合図）、欠席確認、お誘いの言葉、Tの会の一員であることの喜びを表す言葉、造語（Tの会で生まれ、Tの会でしか通用しない言葉）が当てはまる。③は、世間話（家族、自分、知人、食、仕事など多数）、大声のつぶやき（お天気チェック、ファッションチェック、下ネタなど）が当てはまる。

①は、スポーツをする以上発せられてもごく自然な言葉である。②は、Tの会として人々が集まっていなければ、出てこなかったであろう言葉の群である。③は、その種類が実にバリエーションに富んでいる。活動全体に占める③の割合が高く、スポーツと全く関係ない話題であり、なぜ卓球をしながらしなければならぬ話なのか、と疑問を抱かせるほどである。

視点2 会話の起点

会話の起点は、①「つぶやき型」(見たこと、感じたことをすぐさま口にしたもの)、②「情報提供型」(自分の知っていることを相手に伝えようとするもの)、③「質問型」(文末が疑問形になっているもの)、④「お誘い型」(仲間に提案、勧誘する言葉)の4つに分類される。これら会話の起点は、主にラリーが途切れているときに起こりやすい。

視点3 会話の伝染

会話の伝染は、①「共鳴型」(前の発話者に続いて、心地よいリズムで順番に同じ言葉、あるいは少し変化させた言葉を繰り返すことで、すぐさま会話が成立するもの)、②「合流型」(会話が進んでいくにつれ、徐々に複数の人が会話に参加してくるもの)の2つに分類される。また、それなりに言葉のやりとりはあるが、話にふくらみがなく一瞬で終わる、会話とは呼びがたい言葉のまとまりが観察され、これを「会話の不発」呼ぶことにした。①「共鳴型」や「会話の不発」のほとんどが、プレイ中に観察されることから、卓球のリズムが発生させる会話が存在すると考えられる。

視点4 会話の時間的位置

人々が活動のどの時点で、どんな話題で盛り上がっているかを調べた。その結果、「深い話」(深刻な話、感慨深い話、うん蓄、大勢の前でするのはあまり好ましくない話)は、活動の中盤から後半に多く分布している、活動の後半のプレイ中にまとまった会話が多い、などの特徴があることが分かった。

視点5 プレイの集中度

プレイ中の、①スマッシュ、②喜びを表す態度、③悔しさを表す態度、④会話によるプレイの中断の数を、プレイに集中しているときと会話に集中しているときにわけて数えた。プレイに集中しているときは、①、②、③が頻繁に観察され、④は観察されない。逆に会話に集中しているときは、①、②、③がほとんど観察されず、④はよく観察される。また、活動全体を通すと、前半はプレイに集中しているが、後半にいくにしたがって徐々にその集中度が会話に移行していく傾向が見られる。

第4章 考察

「なぜ人々はおしゃべりをやめないのか？」

人々がおしゃべりをやめない原因として、「卓球照れくさい説」(一対一で決まったかけ声もなく、向かい合って行う卓球は照れくさいスポーツである)、「スポーツは日常の一コマである説」(おばちゃん達にとってスポーツ活動は日常生活の一部に過ぎない)、「スポーツおしゃべり誘発説」(ラリーの途切れがきっかけとなり、短時間に話題が切り替わる)

の3つが考えられる。スポーツをすることで、短時間に何種類ものおしゃべりを楽しめて、なおかつ健康にもよい。スポーツ中であろうが、おばちゃん達にとって大好きなおしゃべりをやめる理由など全くない。

「おしゃべりはスポーツに必要なのか？」

おしゃべりには、「参加型BGM効果」(質疑応答の可能なBGMであり、自らも参加できて心地よい)、「ギブアンドテイク効果」(情報交換)、「照れくささ解消効果」(照れくささを解消する)、「充電効果」(プレイの飽きを埋め、活動全体への意欲の低下を阻止する)、「勝敗うやむや効果」(「負けっぱなしだ」という劣等感を一時的に軽減させる)の5つの効果が期待される。人々がよりよいスポーツ活動を継続していくためには、これらの要因が不可欠であることから、おしゃべりはスポーツに必要なものであるといえる。

第5章 結論

本研究は、おしゃべりが歓迎されているスポーツ集団「Tの会」を取り上げ、そこでは人々がどのように会話しているのか、なぜ人々はおしゃべりをやめないのかを明らかにすることを目的とするものであった。Tの会は、50～60代の女性参加者が多く、求められる運動技術も運動強度もさほど高くないスポーツ集団であった。以下は、本研究から得られた結論である。

(1)「スポーツ中の人々はどのように会話しているか」という問いに対しては、①スポーツ中の人々は、「つぶやき型」、「情報提供型」、「質問型」、「お誘い型」の4パターンを起点に、「スポーツに関すること」、「Tの会に関すること」、「スポーツ以外に関すること」の3パターンに分類される内容を、「共鳴型」、「合流型」の2パターンの伝染方法を経由して会話している。②スポーツ中の人々は、ラリーの最中以外を起点として会話している。③スポーツ中の人々は、特別伝えたいニュースがない限り、活動の前半には「軽い話」を、中盤から後半にかけては「深い話」を選択して会話している。④スポーツ中の人々は、プレイに集中しているときは「スポーツに関すること」について、会話に集中しているときは「スポーツ以外に関すること」について会話しているが、プレイから会話へ徐々に集中度を移行させるように会話している。

(2)「なぜスポーツ中に人々がおしゃべりをやめないのか」、その原因として「卓球照れくさい説」、「スポーツは日常の一コマである説」、「スポーツおしゃべり誘発説」の3つが考えられた。

(3)「おしゃべりはスポーツに必要なのか」という問いに対しては、おしゃべりには、人々がスポーツ活動を継続するために必要な要素を有している。人々が快適に活動をしていくためにも、おしゃべりはスポーツに必要なものであると考えられる。